国立国語研究所学術情報リポジトリ

全体から細部を見る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2126

全体から細部を見る

山口　佳紀

研究する者にとって何が大事かなどと言い出すと，大事なものはいろいろありそうだが，特に重視すべきなのは，個々の事象を個々に見るのではなくて，それを全体の中で見るという態度であろうと思う。細部についての判断を積み上げていっても，全体は見えてこない。むしろ，全体に対する見通しを優先させることによって，細部がはっきり見えてくるのではないだろうか。以下では，上記のようなことを極めてささやかな例で考えてみたい。

『万葉集』には，次のような歌が収められている。

百小竹（ももしの）の　三野王（みののおほきみ）　西（にし）の厩（うまや）　建てて飼ふ駒　東（ひむかし）の厩（うまや）　建てて飼ふ駒　草こそば　取りて飼ふと言へ　水こそば　汲みて飼ふと言へ　何しかも　葦毛の馬の　い鳴き立てつる（巻13・3327）

この歌の作られた事情は特に記されていないが，三野王という人が亡くなった時に，生前大切に飼っていた馬がいつもとは違った声で鳴き立てたという歌である。内容は特別変わった歌ではないが，この歌を読んだ時に，「東（ひむかし）の厩（うまや）」という箇所で何か異様な感じを受けなかったであろうか。その感じ方は当然であって，このままであると，５音が現れるはずの箇所に８音も使われていることになるのである。

もっとも，古代の和歌では，ウマヤのウのように，句の中途に母音だけの音節が現れると，前のノの音節と一体になるため，１音分は減ることになるが，それでも，５音が期待される箇所に７音が使われていることになるのである。この読み方は，不思議に疑われることがなく，どの注釈書も同じような読み方をしているが，筆者から見ると，不可解としか言いようがない。

実をいうと，「東（ひむかし）の厩（うまや）」は原文では「角厩」と書かれている。「角」がなぜ「ひむかし」（＝「ひがし」の古形）と読めるかというと，中国音楽の基本音階として「五音（ごいん）」があり，それは「角（かく）・徵（ち）・宮（きゅう）・商（しょう）・羽（う）」の五つから成るが，「角」を方角に当てはめると，「東」に相当するというのである。

しかし，この場合，そのような知識よりも大事なのは，和歌が，短歌はもとより長歌であっても，５音と７音を基本とする音数律をもっているということではないか。そのことを重視するならば，これは「角（すみ）の厩（うまや）」と読むべきであり，「西（にし）の厩（うまや）」の句と合わせると，三野王が屋敷の西の隅に厩を建てて馬を飼っていた情景を表現していることになる。

そもそも，言うまでもなく『万葉集』の歌は漢字ばかりで書いてあるが，それでも当時の人には読めたし，時代が変わった我々にもかなりの程度読めるのは，それらの歌が音数律を有しているからである。もしそれがなかったら，どこで句切っていいか分からず，ほとんど読めないものになったはずである。

細部は大事でないということを言おうとしているわけではない。細部も大事にしたいが，全体的な見通しのないままに細部を見ようとすると，正しい判断ができなくなるということを，一例をもって述べようとしたものである。